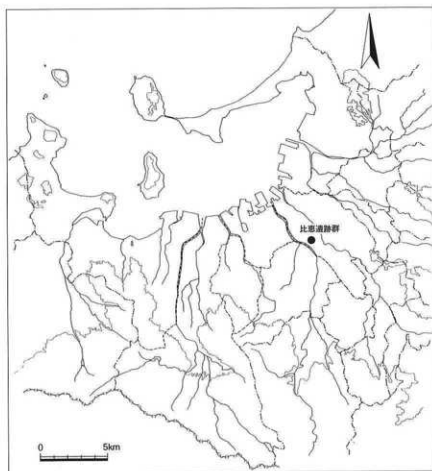


比 恵 60

—比恵遺跡群第 89・118 次調査報告—



遺跡略号 HIE89 HIE118
調査番号 0355 0861

2011

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な努めであります。

福岡市教育委員会では開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財については事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

今回報告する比恵遺跡群第 89・118 次調査においても発掘調査により多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまで関係各位のご理解を賜り、ご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

平成23年3月18日
福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例 言

1. 本書は福岡市教育委員会が平成15年度に博多区博多駅南4丁目124番1において実施した比恵遺跡群第89次調査と平成20年度に博多区博多駅南6丁目6番2において実施した比恵遺跡群第118次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測は長家伸が行った。
3. 遺物の実測は長家、大庭友子が行った。
4. 製図は長家が行った。
5. 写真は長家が撮影した。
6. 本書で用いる方位は磁北であり、座標北から6°西偏し、真北から6°18'西偏する。なお座標は特に断らない限り日本測地系を使用している。
7. 本書で用いる遺構番号は通し番号にし（欠番あり）、報告の際には遺構の性格を示す略号を付して表記している。略号は溝（SD）、土坑（SK）、ピット（SP）である。
8. 本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので、活用いただきたい。
9. 本書の編集・執筆は長家が行った。

比恵遺跡群第89次調査

遺跡調査番号	0355		遺跡略号	HIE - 89	
所在地	博多区博多駅南4丁目124番1			分布地図番号	37 - 0127
開発面積	430.15㎡	調査対象面積	300.98㎡	調査面積	250㎡
調査期間	平成15年11月19日～平成15年12月10日			事前審査番号	14 - 2 - 534

比恵遺跡群第118次調査

遺跡調査番号	0861		遺跡略号	HIE - 118	
所在地	博多区博多駅南6丁目6番2			分布地図番号	37 - 0127
開発面積	963.43㎡	調査対象面積	170㎡	調査面積	192㎡
調査期間	平成21年2月25日～平成21年3月12日			事前審査番号	20 - 2 - 747

本文目次

I	比恵遺跡群の立地と環境	1
II	第89次調査報告	5
	1 調査にいたる経過	5
	2 調査体制	5
	3 調査概要	5
	4 遺構と遺物	8
	1) 溝	8
	2) ビット	12
	3) 小結	12
III	第118次調査報告	14
	1 調査にいたる経過	14
	2 調査体制	14
	3 調査概要	14
	4 遺構と遺物	17
	1) 溝	17
	2) 土坑	23
	3) ビット	27
	4) 小結	27

挿図目次

第1図	調査区位置図1 (1/50,000)	2
第2図	調査区位置図2 (1/2,500)	3
第3図	調査区位置図3 (1/4,000)	4
第4図	調査区位置図4 (1/500)	6
第5図	調査区全体図 (1/100)	7
第6図	SD01実測図 (1/40)	8
第7図	SD01出土遺物実測図1 (1/3)	9
第8図	SD01出土遺物実測図2 (1/3)	10
第9図	SD04~06及び出土遺物実測図 (1/40、1/3)	11
第10図	SP02・03出土遺物実測図 (1/3)	12
第11図	調査区位置図5 (1/500)	15
第12図	調査区全体図 (1/200)	16
第13図	調査区壁面土層 (1/60)	17
第14図	SD01土層及び遺物出土状況実測図 (1/40)	18
第15図	SD01出土遺物実測図1 (1/3)	19
第16図	SD01出土遺物実測図2 (1/3)	20
第17図	SD01出土遺物実測図3 (1/3)	21

第18図	SD01出土遺物実測図4 (1/3)	22
第19図	SK02~05及び出土遺物実測図 (1/30、1/3)	24
第20図	SK06~09及び出土遺物実測図 (1/30、1/3)	25
第21図	SK21・22及び出土遺物実測図 (1/30、1/3)	26

写真目次

写真1	東半全景 (西から)	13
写真2	西半全景 (東から)	13
写真3	SD01 (東から)	13
写真4	SD01土層	13
写真5	SD04・05土層	13
写真6	SD06 (北から)	13
写真7	1区北西半全景 (南から)	28
写真8	1区北西半全景 (東から)	28
写真9	1区南東半全景 (北東から)	28
写真10	SD01 (北西から)	28
写真11	SD01土層	28
写真12	SD01上層遺物 (34・36) 出土状況 (西から)	28
写真13	SK02 (西から)	29
写真14	SK02土層	29
写真15	SK03 (北西から)	29
写真16	SK05 (北から)	29
写真17	SK05土層	29
写真18	SK06~08 (東から)	29
写真19	SK06土層	30
写真20	SK07土層	30
写真21	SK08土層	30
写真22	2区全景 (北西から)	30
写真23	1区北西壁土層	30
写真24	2区北東壁土層	30

I 比恵遺跡群の立地と環境

比恵遺跡群は福岡平野の中央部分を北流する那珂川と御笠川に挟まれた洪積丘陵上に立地する遺跡群である。丘陵の基盤層は花崗岩礫層で、この上面に阿蘇噴火火砕流・火山灰である八丈粘土層・鳥栖ローム層・新时期ローム層が堆積している。南側に隣接する那珂遺跡群とは一連の丘陵上の遺跡群を構成するものと考えられ、その範囲はあわせて南北24 km、東西1 kmに及ぶと考えられる。

比恵遺跡群では2010年度末までで120次を超える調査が行なわれている。今回報告する比恵遺跡群第89・118次調査地点は、比恵遺跡群中央～南部に位置し、周辺でも多くの調査が行なわれている地点である。

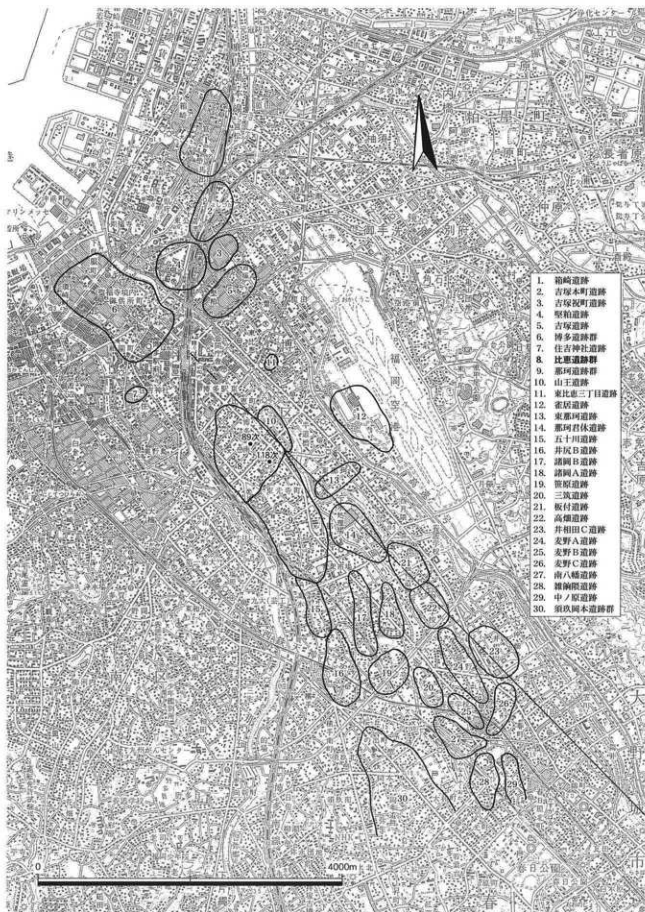
比恵遺跡群における弥生前期の集落は北側先端部・西側縁辺部の丘陵縁辺部に集中しており、竪穴住居跡・貯蔵穴を主体とした遺構群が展開している。水田についても北端部4次調査で検出したように、丘陵縁辺部に面した低湿地等に営まれていたようである。

中期前半になると丘陵中央部に集落が進出し、後半には非常に濃密な遺構群が確認できる。集落は竪穴住居跡・掘立柱建物・土坑・溝・井戸等で形成され、集住傾向を見せると共に、50次調査では径125 mの大型円形竪穴住居をはじめとする大型の住居群が確認されている。また井戸の掘削も比恵遺跡群の特徴のひとつである。中期後半から急激に増加し、那珂遺跡群とあわせると弥生時代の井戸は500基を超える。中期後半には15・53・118次調査地点で確認された大溝が遺跡群中央を縦断しており、多量の土器が廃棄されている。この溝は北側では35・40・58次調査地点につながるものと推定されており、集落を区画する基準になる溝として評価されている。また、埋葬遺構としては6・16次調査で墳丘墓が復元されており、中心主体である6次調査SK-28からは、甕棺墓より細型銅剣が出土している。同様な埋葬遺構群は、丘陵北端部や那珂遺跡群内で数箇所確認されている。更に、鋳造関係の遺物も多く確認されており、40次調査の取瓶や42次調査の工房状遺構をはじめ、各所で出土する鋳型などから青銅器・ガラスの生産が行われていたことが明らかである。またこの時期には丘陵北側数百mに位置する低湿地地上において広大な水田が開かれており（東比恵三丁目遺跡）注目される。

後期から古墳時代前期にかけても井戸の掘削は続いており、集落は継続している。また、1次調査で確認された方形環溝がこの時期に掘削されており、後期初頭～前半に掘削された1号、後期中頃の3号、終末～古墳時代前期の2号と変遷していく。終末期には2条の並列溝が那珂遺跡群から比恵遺跡群まで丘陵を縦走する。この並列溝は道路状遺構として評価されており、この溝に平行して同時期の遺構が配置されていることから、丘陵上の土地利用の基準軸となったものと考えられている。今回の調査地点周辺では50・62次調査で検出している。前述の2号環溝もこの並列溝から200 mほど離れているが、主軸方位はほぼ平行している。

古墳時代中期に至ると遺構・遺物の検出率が非常に少なくなる。6・16・17・89次調査地点で検出した比恵1号・2号墳がこの時期にあたるものと考えられているが、区画整理等の削平により、主体部は確認できていない。溝埋土中から赤色顔料を塗布した板石などが出土しており、棺材の一部である可能性が考えられる。なお、今回復元できた1号墳の主軸方位は2号環溝とは異なっており、1号墳築造時には前代までの規制が失われていたことが想定できる。

古墳時代後期には比恵遺跡群では南半部分を中心として、竪穴住居跡・掘立柱建物・井戸が検出されており、再び集落が形成されている。該期の集落も切り合い関係が著しく、集落の移動・拡大を行わず、固定されたエリアでの建て替えを行ってきたようである。



第1図 調査区位置図1(1/50,000)



第3図 調査区位置図3 (1 / 4,000)

II 第89次調査報告

1 調査にいたる経過

平成14年10月31日付けで個人事業者より福岡市教育委員会宛に福岡市博多区博多駅南4丁目124番1の物件に関して、診療所兼個人住宅建設に関わる埋蔵文化財の有無について照会があった(事前審査番号14-2-534)。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群(分布地図番号37-0127・遺跡略号HIE)の範囲内にあるため、申請者宛に試掘調査の必要がある旨を回答した。その後、土地所有者の承諾を経て、平成15年10月14日に試掘調査を行い、表土直下の鳥栖ローム層上面でピット等の遺構を検出した。この成果を受けて、埋蔵文化財課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い(14福市教理第2-534号)、その取り扱いについて協議を行った。その結果、建設予定建物の構造上、遺構の破壊が避けられないため、敷地面積430.15㎡のうち建物建設にかかる300.98㎡について、平成15年度に発掘調査を行い、記録保存を図ることで協議が成立した。

調査期間は平成15年11月19日～平成15年12月10日である(調査番号0355)。調査面積は250㎡、遺物はコンテナ7箱分出土している。

現地での発掘調査にあたっては、関係の皆様から発掘調査についてご理解頂くと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

2 調査体制(平成15年度)

事業主体 個人

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 埋蔵文化財課長 山崎 純男

調査第2係長 田中 壽夫

調査庶務 文化財整備課 御手洗 清

調査担当 調査第2係 長家 伸

調査作業 澄川アキヨ 中村フミ子 岩本三重子 越智信孝 藤野トシ子 中村サツエ

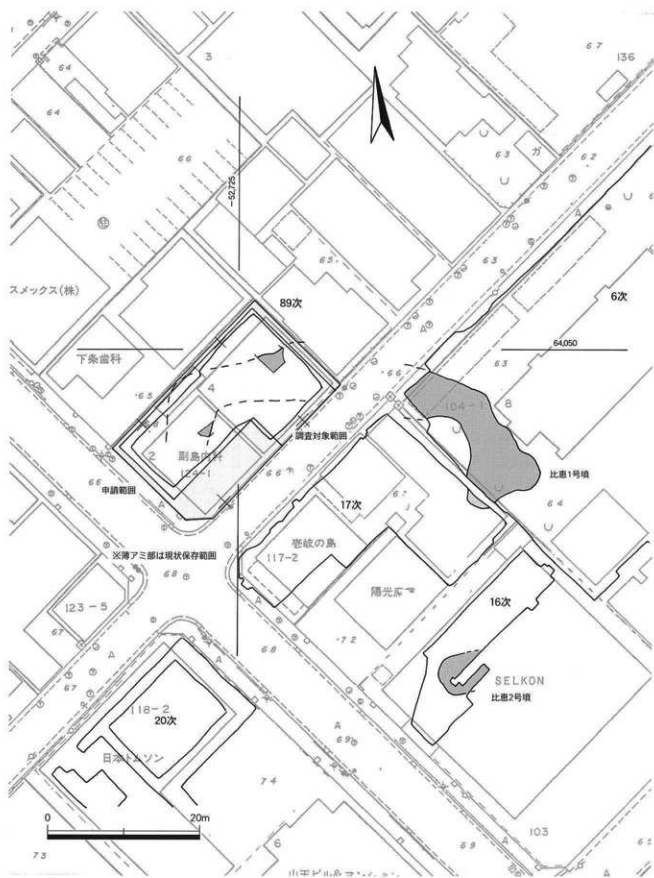
藤野幾志 西川シズ子 宮崎幸子 柴野孝子 中島道夫

3 調査概要

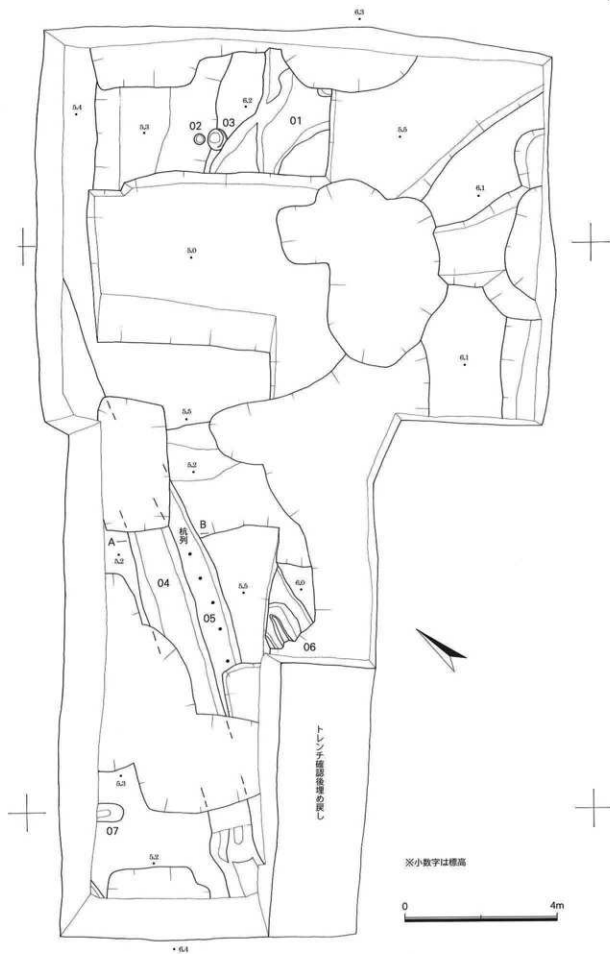
今回の調査で対象となったのは、申請面積430.15㎡のうち、駐車場用地等を除いた建物建設にかかる300.98㎡である。調査は既存の昭和45年に建設されたコンクリート造の医院解体後に行い、重機による表土除去の後、人力による遺構精査・掘削作業を行った。なお、廃土を場内処理する必要から、対象地を東西に分け、土砂を反転して調査を行っている。

調査前現況の標高は6.4m前後を測る。遺構面は鳥栖ローム層上面であるが、旧建物等による攪乱・削平が著しく、旧状はほとんど失われている。遺構面は南側が表土直下の標高6.15m前後、北側は標高5.4～5.2mを測り、遺構面直上には厚さ10cm程の旧水田土が認められる。遺構面は北側が1m前後低くなっているが、昭和初期の測量図には調査区西側に水路が表現されており(第3図)、この付近を境として、北側が一段低く造成されていたものと考えられる。

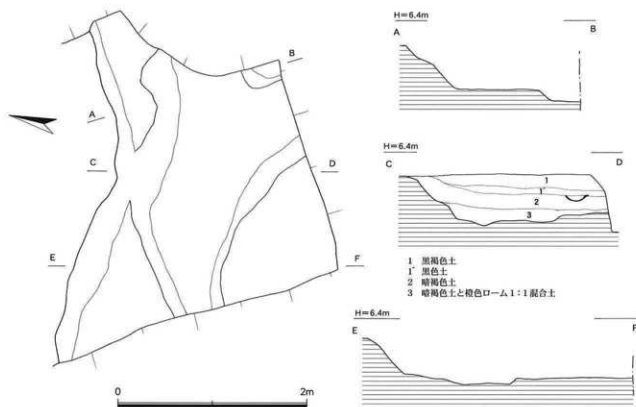
調査は東半部分より行い、SD01とこの北側にピット2基(SF02・03)を検出した。SD01は6次調査で確認された古墳周溝につながるものと考えられる。この後土砂反転をし、西半部の調査を行った。西側ではSD01の延長の可能性が考えられるSD06と、近世以降のSD04・05・07を検出した。



第4図 調査区位置図4 (1 / 500)



第 5 図 調査区全体図 (1 / 100)



第6図 SD01実測図 (1/40)

4 遺構と遺物

1) 溝

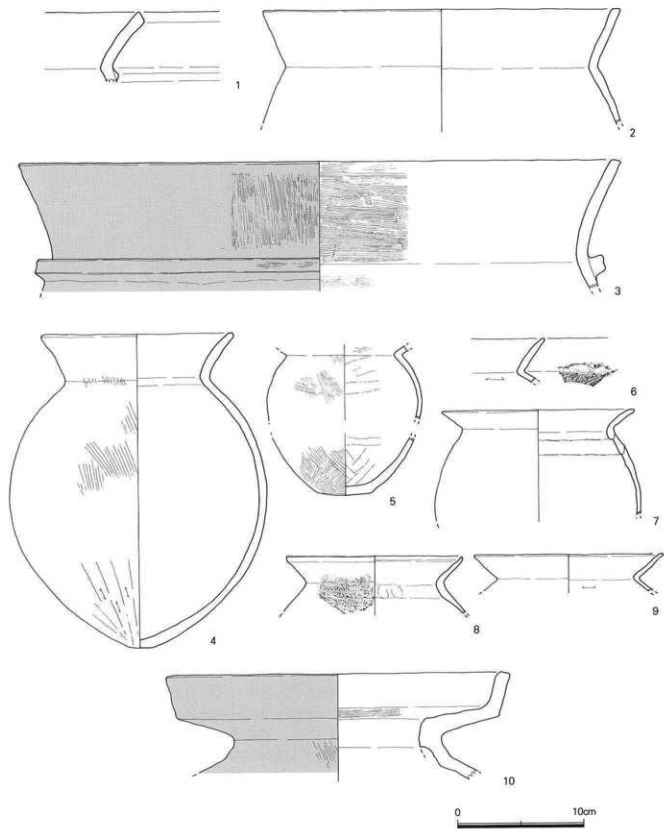
SD01 (第6図)

調査区東端で検出する。SP03を切り、略東西方向に延びている。北側を除く3方向を攪乱によって失っているため、溝幅・断面形状等不明瞭な点が多い。検出した溝長は3.5m、幅は2.8m以上を測る。溝底は南北両側に平坦面を有し、中央が一段深くなっている。1・1'・2層からは小破片が主体であるが弥生時代中期～古墳時代初頭の遺物が多量に出土し、須恵器は出土していない。

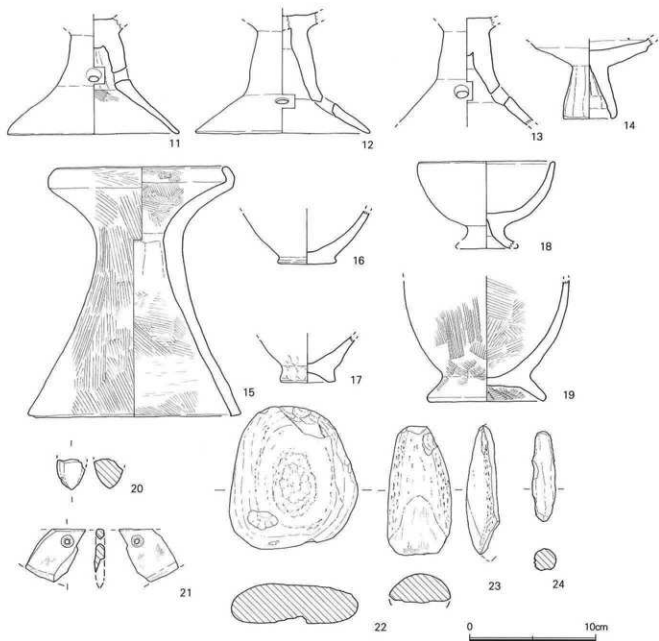
本溝は位置的な関係から、本調査地点の南東に位置する6次調査の比恵1号墳周溝につながるものと考えられる(第4図)。6次調査では、周溝は幅5m、検出面からの深さ60cm程を測り、南側で立ち上がっている。出土遺物は多量で、上層からは弥生時代中期～古墳時代後期の土器・石器が出土し、下層からは古墳時代初頭に位置付けられる土器が出土している。本調査地点出土遺物もこの下層出土遺物と対応するものであり、断面形状・底面レベルや非常に多くの遺物が含まれているという出土状況も類似している。更に、後述するSD06も一連の溝である可能性があり、本調査地点でSD01からSD06に向かって屈曲したものと考えられる。

出土遺物 (第7・8図)

1～3は口縁部が「く」字状に屈曲する甕である。1は内外面横ナデによる調整を行い、屈曲部外面には断面三角形の突帯を貼り付ける。2は口縁端部を面取りし水平にそろえる。色調は灰白色を呈し、胎土には石英砂粒を多く含んでいる。3は外面に赤色顔料を塗布している。屈曲部には断面「コ」字状の突帯を貼り付ける。調整は口縁部外面には縦刷毛を行い、突帯周辺は貼り付け時の横ナデが残る。内面は横～斜めの刷毛目を施し、屈曲部付近のみ横ナデによって刷毛が消えている。4は口縁部先端にかけて外反気味に広がり、端部は丸く納める。胴部は長球形を呈し、径2cmほどの小さな平

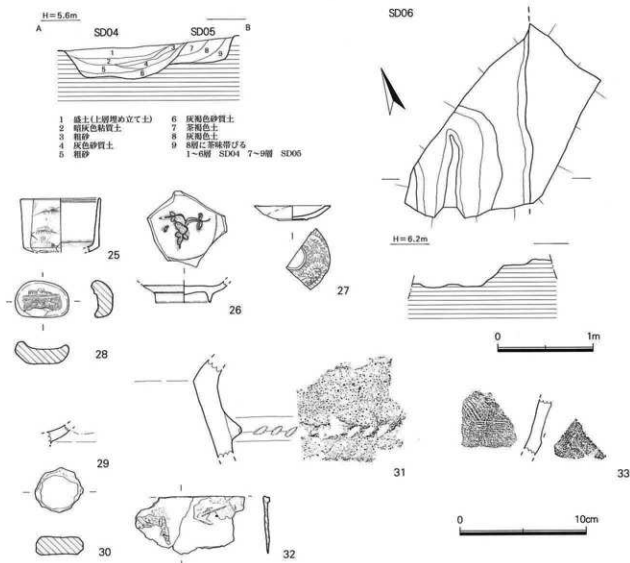


第7図 SD01 出土遺物実測図1 (1/3)



第8図 SD01 出土遺物実測図2 (1/3)

底が残る。灰白色を呈し焼成がやや軟質で、調整の剥落が進んでいるが、外面頸部及び胴部上半には1cmあたり7本程の縦刷毛が残る。また、下半1/3は縦方向のヘラ削りを行っている。内面は横ナデであろう。5は球形の胴部に、レンズ状の底部を有する。色調は橙色を呈し、胎土には石英・長石・雲母を含んでいるが、比較的精良である。調整は胴部～底部外面には刷毛を行う。また、口縁部内面にはわずかに横刷毛が残り、胴部内面はヘラ状工具によるナデの痕跡が認められる。6・7は口縁部中位をやや肥厚させるが、ほぼ直線的に外方に伸ばしている。6は胴部外面に右上がりのタキキ痕が残り、内面はヘラ削りを行う。7は2次的な焼成を強く受けて調整が不明瞭になっている。胴部は薄く仕上げているが、幅1.5cmほどの粘土紐の単位が比較的明瞭に残っている。8は口縁端部を上方に摘み上げている。また、胴部外面にはほぼ水平のタキキが残っている。内面は屈曲部に指押さえの痕跡が残り、以下は剥落している。9の口縁部はわずかに内湾気味となり、端部を内側に肥厚させる。

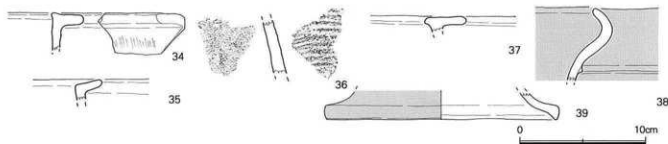


第9図 SD04～06 及び出土遺物実測図 (1/40、1/3)

調整は不明瞭ながら、胴部内面には横方向のヘラ削りを行う。10は二重口縁の壺である。口縁部は短く直立し、口縁部～胴部外面には丹塗りを施す。また、口縁部内面の平坦面から胴部内面にかけて焼成により黒化している。胎土には石英砂粒を少量含み、丹塗りの剥落した外面は灰白色を呈する。11～14は高杯である。11～13は筒部がわずかに中膨らみとなり、裾は内湾して広がる。いずれも屈曲部に3ヶ所の穿孔を施している。14は短脚で裾部を持たない。脚外面は縦方向のヘラナデを行う、内面は指ナデの痕跡が残る。坏部は中ほどに段を有するが、それ以上は失われている。15は器台である。受け部は外方に広がって、口縁部は袋状に屈曲する。調整は口縁部外面横刷毛、それ以下は縦刷毛を行う。内面も全体に刷毛目調整であるが、筒部中位には指ナデを行う。16・17は底部破片である。16は円盤状の底部を貼り付けている。17は輪状の底部を貼り付けており、外面には指押さえの痕跡が残る。18・19は脚が付く。18は短い筒部を有する碗である。19は器面全体に刷毛目調整を行う。20は土製投擲の欠損品である。21は石包丁、22はくほみ石である。23は石斧の欠損品である。24は酸化土砂が付着し形状不明となった棒状鉄製品である。

SD04・05 (第9図)

調査区中央を略南北方向に並走する2条の溝である。土層観察の結果SD05が先行し、埋没後に



第10図 SP02・03 出土遺物実測図(1/3)

SD04が掘削されたものと考えられる。昭和初期作成の測量図(第3図)によれば、本調査地点西側に略南北方向に走る溝が表現されており、今回確認したSD04・05がその位置に当たるものと考えられる。SD04の3～6層には粗砂・砂質土が互層状に堆積しており、水路としての使用をうかがうことが出来る。SD05では溝底に70～90cm間隔で木杭が確認できた。共に近世・近代の染付のほか弥生土器破片等が出土している。

出土遺物(第9図 25～32) 25～28はSD04出土である。25・26は染付である。27は青白磁で、露胎となった外面に型押しした唐草模様を施す。28は土製の型で、内面に不明の文様が残る。

29～32はSD05出土である。29は近世陶器の碗、30は瓦玉である。31は弥生時代後期の大型甕破片である。32は不明の板状鉄製品である。表面の一部に木質が付着している。

SD06(第9図)

調査区中央で検出し、南側の壁を除く3方向が削平を受け失われている。埋土は上面に攪乱土が認められるが、それ以下は暗褐色土である。断面は階段状に掘り下げられているが、溝底は中央がわずかに高くなっている。検出面から底までの深さは30cm弱である。遺物は小破片のみでコンテナ1箱分出土している。弥生時代中期後半～末のものが主体を占めるが、内面に刷毛目を有する土器破片も認められる。また、少量須恵器破片も含まれるが大半は上層攪乱混入土からの出土である。積極的な根拠には乏しいが、SD01の2層と同様の埋土で、小破片を主体とする多量の遺物を包含している点などの共通点があり、SD01からSD06へと屈曲する一連の溝となる可能性を考えておきたい。

出土遺物(第9図 33) 内面に刷毛目を有し、外面は板ナデ状の削りを行う甕下半小破片である。

2) ビット

今回の調査ではビットは2基確認するのみである。埋土はいずれも暗褐色土で、土器小破片が出土している。SP02は直径30cm、検出面からの深さは40cmである。SP03はSD01に切られ、直径55cm、南側に一段平坦面を有し、検出面からの深さは50cmを測る。

出土遺物(第10図) 34～36はSP02出土。37～39はSP03出土である。36は外面タタキ、内面には刷毛目を施す。38・39は丹塗り土器である。

3) 小結

今回の調査地点は削平・攪乱が著しく遺構の残存状態が極めて不良であったが、6・17次調査で確認した比恵1号墳周溝の延長と考えられる溝を確認することができた(第4図)。SD01が周溝北辺部にあたり、SD06は屈曲した西辺部にあたる可能性が考えられる。この推定によれば周溝は陸橋を有し、周溝内法東西長は34mを測る方形に復元できる。所属時期は6次調査時に出土した須恵器から5世紀後半代に位置付けられているが、今回の調査ではこの時期の遺物は出土しておらず、古墳時代初頭の良好な遺物が多数出土している。また、隣接する2号墳は1号墳に後続する5世紀末～6世紀初頭と考えられ、溝底より須恵器の坏が出土している。周辺は戦前の区画整理に伴う削平が1mに及んでいると考えられ攪乱も著しいが、古墳の形態やあり方等についても更に検討が必要である。



写真1 東半全景 (西から)



写真2 西半全景 (東から)



写真3 SD01 (東から)

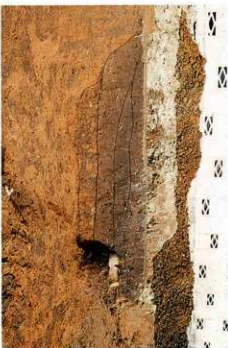


写真4 SD01 土層



写真5 SD04・05土層



写真6 SD06 (北から)

Ⅲ 第118次調査報告

1 調査にいたる経過

平成20年12月22日付けで個人事業者より福岡市教育委員会宛に福岡市博多区博多駅南6丁目6番2の物件に関して、コンビニエンスストア建設に関わる埋蔵文化財の有無について照会があった(事前審査番号20-2-747)。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群(分布地図番号37-0127・遺跡略号HIE)の範囲内にあるため、申請者宛に試掘調査の必要がある旨を回答した。その後、土地所有者の承諾を経て、平成21年2月12日に試掘調査を行い、表土下1.8mの八女粘土層上面で溝状遺構を検出した。この成果を受けて、埋蔵文化財第1課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取り扱いについて協議を行った。その結果、予定建物の構造上、遺構の破壊が避けられないため、平成21年2月25日付けで福岡市教育委員会と事業者の間で事前協議確認書を交わし、敷地面積963.43㎡のうち建物建設にかかる170㎡について、国庫補助金を適用し、平成20年度に発掘調査を行い、記録保存を図ることで協議が成立した。なお、調査途中において、店舗看板部分の工事によって遺構が破壊されることが判明し、協議の結果、新たに調査区として追加している。

調査期間は平成21年2月25日～平成21年3月12日である(調査番号0861)。調査面積は192㎡、遺物はコンテナ12箱分出土している。

現地での発掘調査にあたっては、関係の皆様から発掘調査についてご理解頂くと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

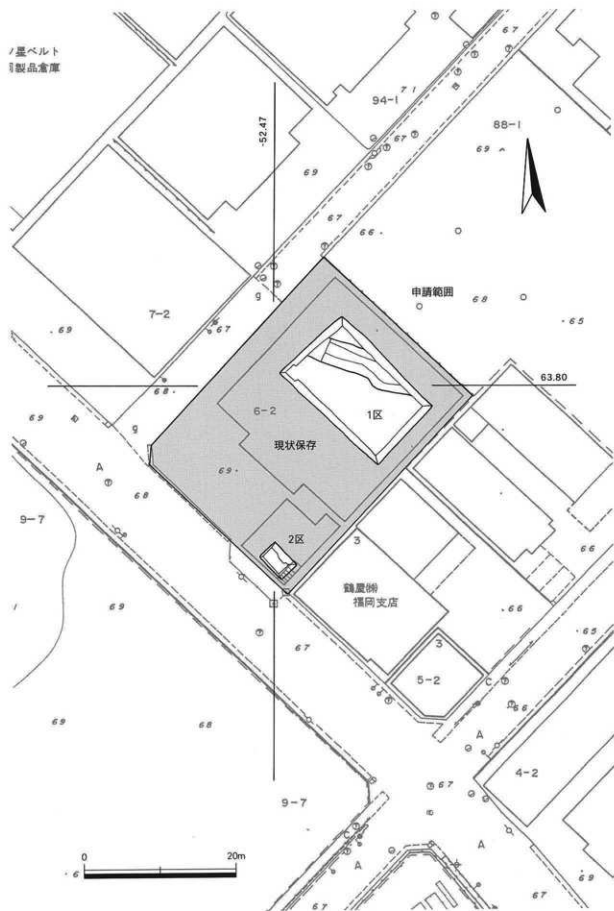
2 調査体制(平成20年度)

事業主体 個人
調査主体 福岡市教育委員会
調査総括 埋蔵文化財第2課長 田中 壽夫
 調査第1係長 杉山 富雄
調査庶務 文化財管理課 古賀 とも子
調査担当 調査第2係 長家 伸
調査作業 岩本三重子 越智信孝 森野孝子 中島道夫

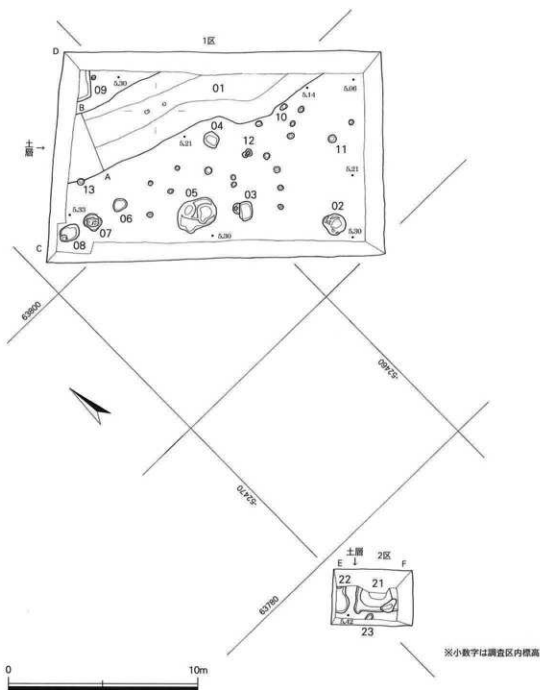
3 調査概要

今回の調査で当初対象となったのは、申請面積963.43㎡のうち、駐車場用地等を除いた建物建設にかかる170㎡であり、重機による表土除去の後、人力による遺構精査・掘削作業を行った。その後、申請地南隅に店舗看板を設置することに伴い、遺構が破壊されることが明らかとなったためこの部分についても調査を行うこととした。この結果店舗部分を1区、看板部分を2区と呼称している。

既存建物解体後の調査前現況の標高は6.8m前後を測り、申請地全体は平坦となっている。1区の基本層序は、まず盛土下に旧水田土壌が検出されている。水田層は少なくとも3面が確認でき、嵩上げを行いながら最終面に至ったようである。また、水田土下には安定した暗褐色土・黒褐色土層が広がっているが遺物を採集するにはいたっておらず、堆積層の形成時期については明らかにしなかった。この黒褐色土直下の平坦な白色八女粘土層上面が遺構面であるが、遺構面標高は5.33m～5.06mを測り東側に向かってわずかに傾斜している。2区では上層の水田土壌が認められなかったが、遺構面直上の暗褐色土・黒褐色土は1区同様に広がっている。2区では標高5.4m前後を測る遺構面の



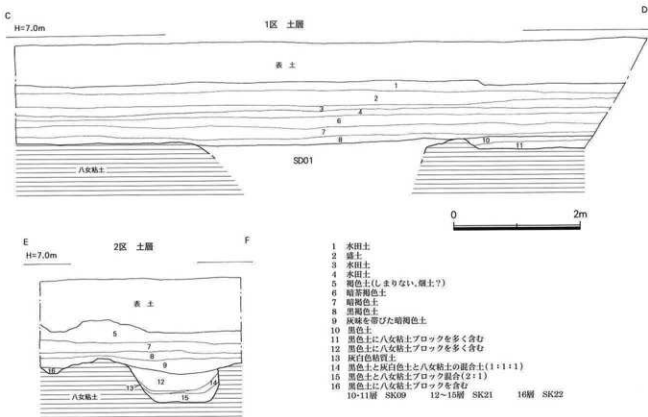
第11図 調査区位置図5 (1 / 500)



第12図 調査区全体図 (1 / 200)

八女粘土層が窪み状の凹凸を有しており、この窪みに土器片を多く含む灰味を帯びた暗褐色土が堆積している。土層観察より遺構埋没後に堆積したものであり、古代以降の堆積と考えられる。

検出遺構は弥生時代中期後半～末の遺物を多量に包含する溝 (SD01) と土坑・ピットである。土坑・ピットからは弥生時代中期以降古代までの遺物が出土しているが、各遺構の所属時期については遺物出土量が少量なものが多く、不明なものが多い。また、SD01については丘陵を縦断する溝と考えられ、北側の第15・53次調査地点でもこの延長が確認されている。



第13図 調査区壁面土層 (1/60)

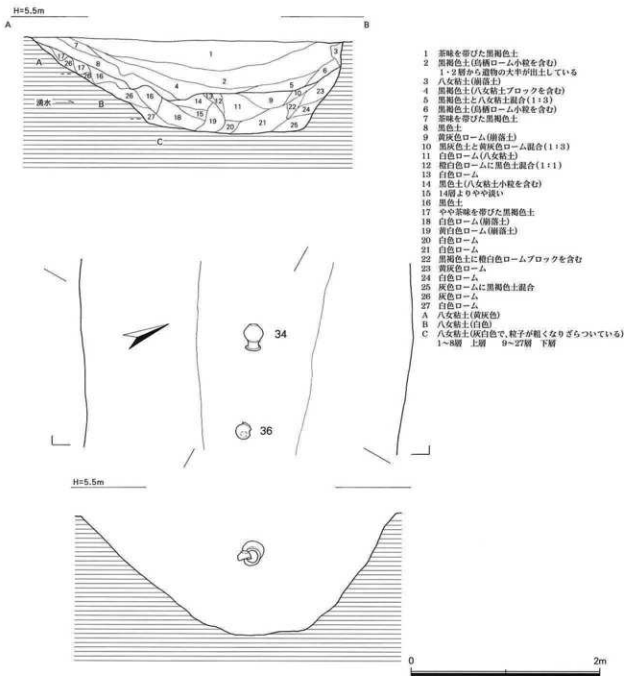
4 遺構と遺物

1) 溝

SD01 (第14図)

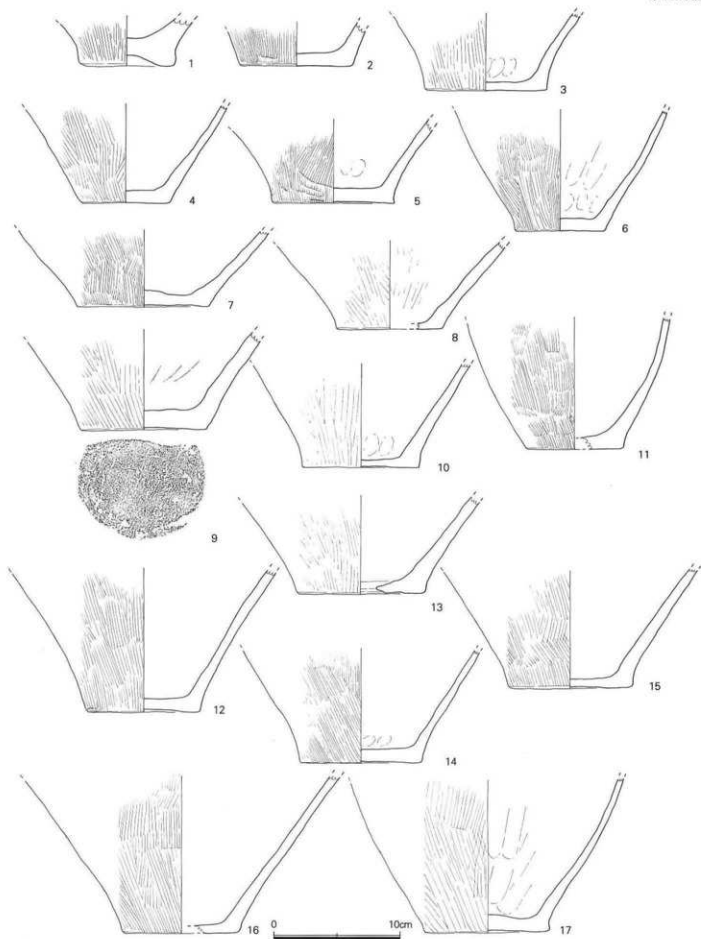
1区で検出する。溝幅3.2m、検出面からの深さは1m程度を測り、主軸方向をN-67°-Wにとる。東側でわずかに屈曲しているが、主軸方位に変化はない。壁面は南壁が35°前後とやや緩やかに立ち上がるが、北壁は65°前後と強く立ち上がっている。掘り方の断面形状は底面がほぼ平坦な逆台形を呈する。埋土は大きく上下2層に分けることができる。上層は黒～黒褐色土を主体としており、数点の完形品を含み非常に多くの遺物が出土しているが、特に1層下位～2層上面で遺物がまとまっている。下層は地山八女粘土の水性2次堆積層に、黒～黒褐色土がブロック状に混在している。掘り下げ時には下層上面で湧水がはじまり、地山がへドロ状となり溶け出ししてくるような状態であったため、人力での掘削が不可能であり、機械による掘り下げを行い断面観察で溝底面を確認したうえで作図している。この結果溝底のレベルは西側で標高4.26m、中央部で3.95m、東側で4.07mであり、中央がやや低くなるが、全体に東側に向かって傾斜している。溝掘削時には現在のレベルでの湧水はなかったものと考えられるが、掘削・通水後の地山の崩落・溶け出しなどによって下層部分は埋没したものであろう。遺物は大半が上層からの出土で、甕・壺・高坏等のほか、甕棺破片や多種の丹塗り土器があり、石器は砥石が1点出土するのみである。また、下層からの出土遺物は弥生中期の土器片6点のみと僅少である。本溝は上層出土遺物から弥生時代中期末頃に溝としての機能が失われ、周辺から多くの遺物が投棄されたものと考えられる。

出土遺物(第15～18図) 1～50は上層出土、51は下層出土である。1～17は甕の底部破片で

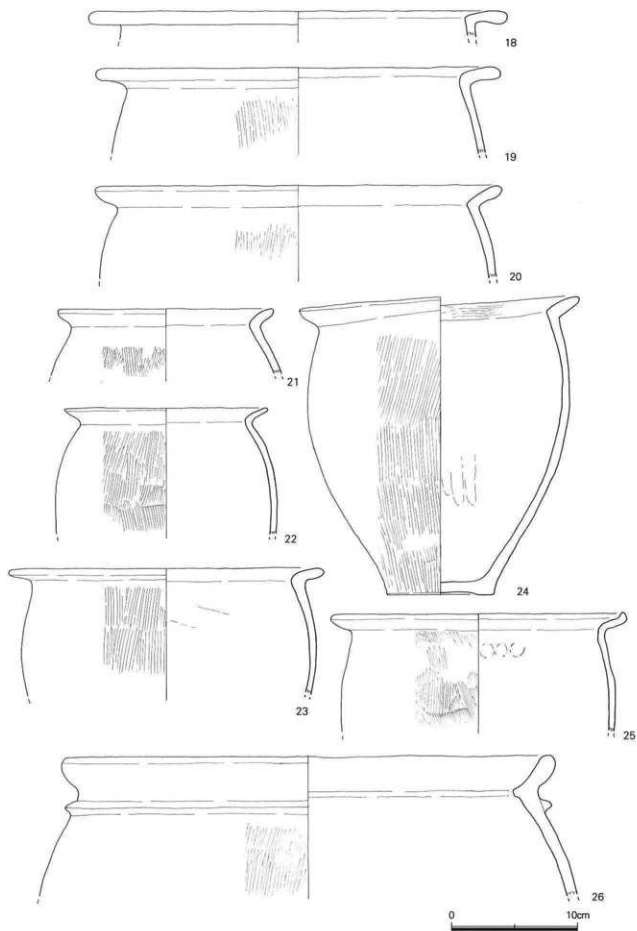


第14図 SD01土層及び遺物出土状況実測図(1/40)

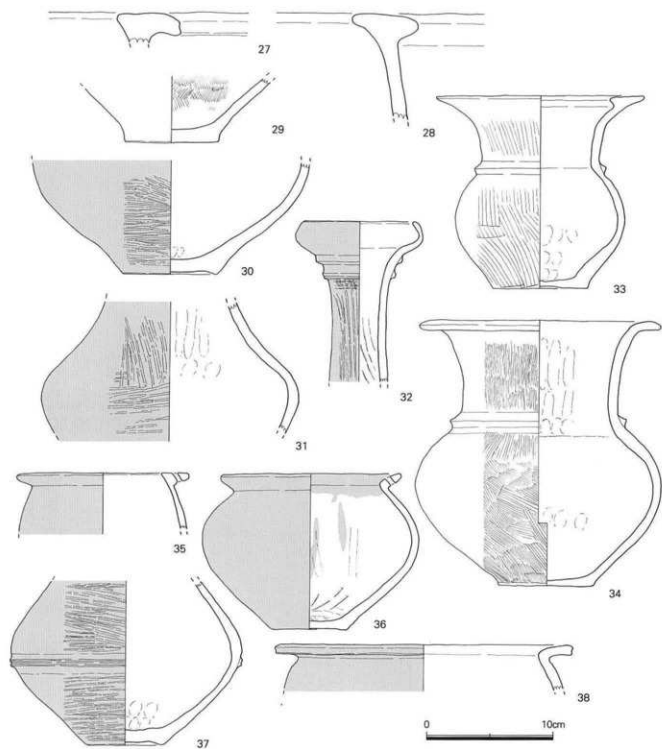
ある。1は上げ底であるが、その他はほぼ平底である。全体に調整は胴部外面縦刷毛、内面はナデによる。外底面もナデによるが、9には工具による削り状の痕跡が残る。また、13の底部には焼成後の穿孔が行われている。18~28は甕口縁部で、24はほぼ完形品である。18は断面逆L字状を呈するが、19~24は「く」字状に屈曲する。調整は胴部外面に縦刷毛を行い、内面はナデ調整である。24は上部1/3ほどに最大径を有し、下位で外反しながら底部にいたる。縦刷毛は底部境界から全面に口縁部方向に向かい、口縁部下では刷毛の後に横ナデを行っている。また外底は輪状に高まりとなり、中央がわずかにくぼむ。口縁部内面には横刷毛が残り、胴部は丁寧なナデを行っている。25は口縁端部を上方に摘み上げ、26は内湾口縁を有する。27・28は甕棺の口縁部であろう。27は断面逆L字



第15図 SD01出土遺物実測図1 (1 / 3)



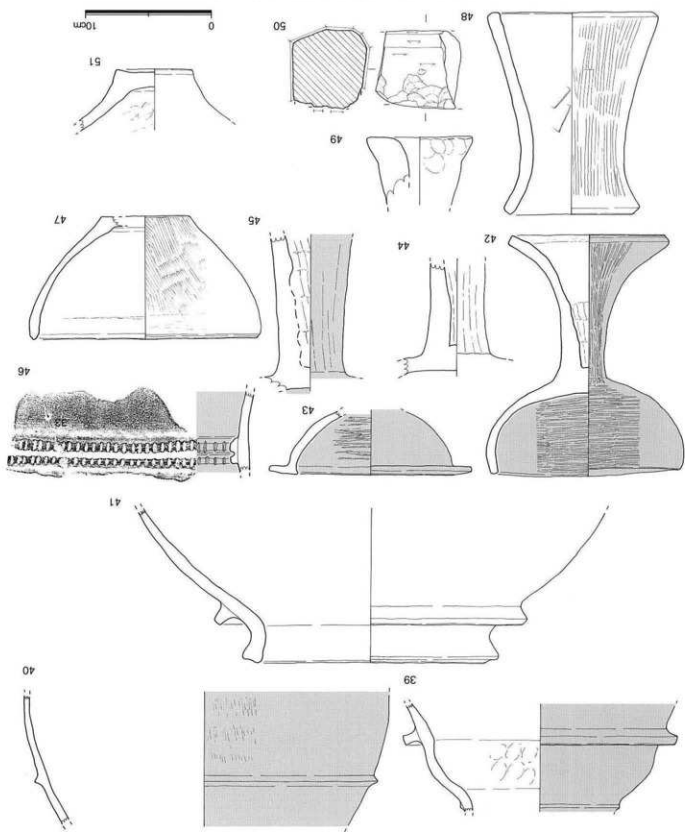
第 16 图 SD01 出土遺物実測図 2 (1 / 3)



第17図 SD01 出土遺物実測図3 (1/3)

状を呈し、上面はほぼ水平となる。28の口縁端部は内側に張り出し、断面形はT字状を呈する。また上面は外傾する。29～38は甕である。29は内面に刷毛目を有し、外面は縦方向にナデを行う。30～32、35～38には丹塗りの痕跡が残っている。33は鋤状口縁を有し、外面には縦刷毛が残る。34は完形品である。外面は全体に縦刷毛を行い、内面はナデ・指押さえによる。

第18圖 SD01出土遺物実測圖4 (1/3)



を有する。36には内面下半にヘラ状工具の小口痕跡が螺旋状に残っている。また、上半は指押さえの後ナデを行う。39は瓢形土器の上部破片である。40は断面三角形の突帯を有する胴部破片である。41は直口の大形壺で、頸部に突帯を貼り付ける。42～45は高坏である。42は調査時点で破損してしまっただが、本来完形で出土した。坏部は内外面横方向のミガキを行い、脚部は外面縦方向のヘラミガキである。44・45の筒部内面にはいずれもしほり痕が認められる。46は丹塗りの胴部破片である。47は碗で外面は縦刷毛、内面下半は斜め方向のナデ、上半は横ナデを行う。48は器台で外面は縦刷毛を行い、内面中位には工具小口痕が認められる。49は支脚小破片である。50は砂岩製の砥石破損品である。ほぼ全面を砥面としている。51は下層出土のやや上げ底となる底部である。内外面ナデによる調整を行う。

2) 土坑

SK02 (第19図)

1区で検出する。一辺1mほどのやや歪な隅丸正方形を呈する。断面皿状を呈し、底面は平坦である。壁面の傾斜は緩く、中途に小さな平坦面を有する。出土土器は須恵器破片が1点のほかは弥生時代中期のものである。同様の埋土であるSK05からも須恵器破片が出土しており、古墳時代後期以降に位置付けられるものであろう。

出土遺物(第19図 52～54) 52は甕の口縁部である。断面逆L字状を呈し、上面はほぼ水平である。53は上げ底を呈する底部である。外面には下端部まで縦刷毛を行う。54は須恵器胴部破片である。内面は回転横ナデ、外面にはカキメを有する。

SK03 (第19図)

1区で検出する。やや歪であるが、平面は1.0×0.7mの略隅丸長方形を呈している。検出面からの深さは20cmを測り、底面は平坦である。壁面にも乱れはなく、断面皿状を呈する。埋土は八女粘土ブロックをわずかに含む黒褐色土で、弥生時代に位置付けられる土器片のみが出土している。

出土遺物(第19図 55) 大型の甕胴部破片である。摩滅が進んでおり調整は不明瞭であるが、残存部の内外面はナデを行っている。また、外面には幅2.5cmほどの低平な粘土帯を貼り付け、粘土帯の上下両端部からそれぞれ斜め方向に刻みを施している。胎土には径2mmほどの石英微砂粒を多く含んでいる。

SK04 (第19図)

1区で検出する。南北長0.9m、東西長0.7mを測り、検出面からの深さは20cm弱である。底面は平坦で、断面皿状を呈する。埋土は八女粘土ブロックをわずかに含む黒褐色土で、形状・埋土共にSK03に類似する。弥生時代中期に位置付けられる小破片のみが出土している。

出土遺物(第19図 56) 断面逆L字状を呈する甕の口縁部小破片で、上面は水平となる。胎土には径1mm以下の石英微砂粒を多く含む。

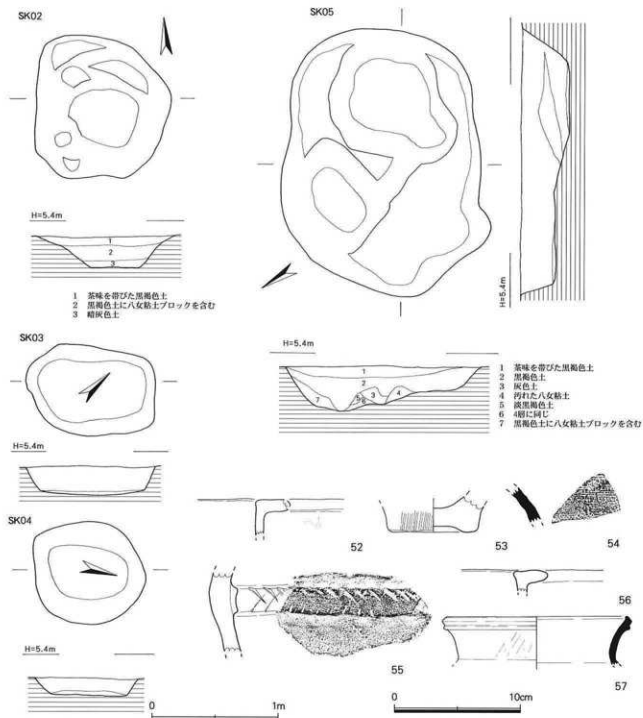
SK05 (第19図)

1区で検出する。長軸2.1m、短軸1.6mを測る。底面には2ヶ所の窪みがあり、最も深いところで検出面からの深さは40cmほどである。遺物は小破片でコンテナ1箱分出土しており、須恵器及び弥生時代中期後半代の土器片が出土している。

出土遺物(第19図 57) 器面の摩滅が進んでいるが、灰白色を呈する須恵器口縁部である。胎土は精良で、器壁は薄手に仕上げている。端部は玉縁状に整形し、外面には沈線状の窪みを有する。

SK06～08 (第20図)

1区で検出する。SD01の西側に並んだ状態で検出した。一辺1m前後の掘り方で、SK07・08は底

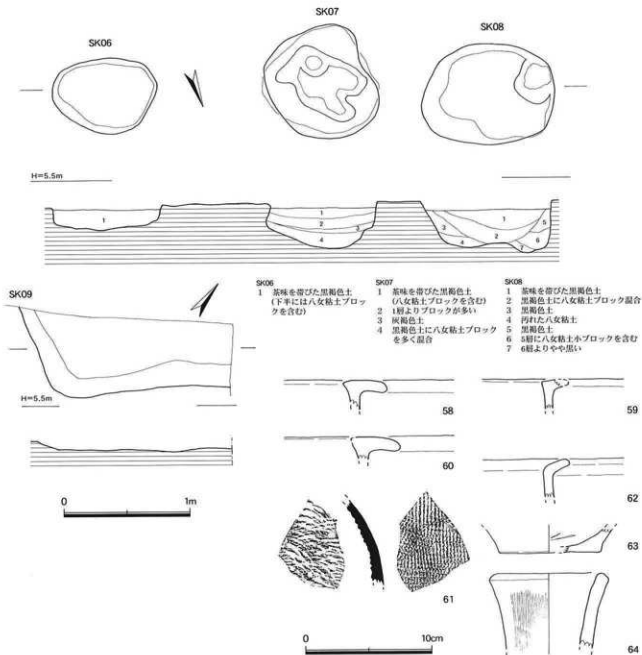


第19図 SK02～05及び出土遺物実測図(1/30、1/3)

面がやや不整形にくぼんでいる。埋土は黒褐色土を主体とし、遺物はSK07から須恵器破片が1点出土するほかは、弥生時代に位置付けられる小破片が出土するのみである。当初建物を構成する可能性を考えたが、柱痕跡等も明らかでないため個別の土坑として報告しておく。

出土遺物(第20図) 58・59はSK06出土である。共に断面逆L字状を呈する甕の口縁部破片である。58は口縁部外側がやや垂れ気味となる。59は口縁部が失われている。

60・61はSK07出土である。60は逆L字状の断面を有し、端部が垂れ下がるものである。61は須



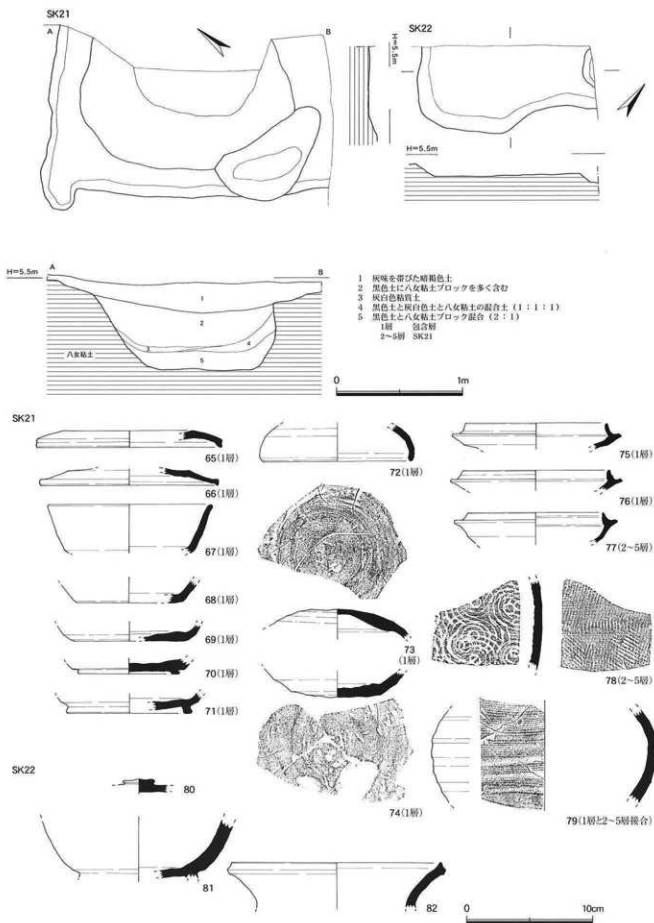
第20図 SK06～09及び出土遺物実測図(1/30、1/3)

石器胴部破片である。外面は擬格子のタタキを行い、内面には青海波の当て具痕跡が残る。

62～64はSK08出土である。62は「く」字状に折れ曲がる口縁部破片である。63は平底の底部である。底部～胴部外面にはナデを行い、内面にはナデに使用した板状工具の小口痕跡が残る。64は器台破片である。外面は縦刷毛、内面はナデによる。

SK09 (第20図)

1区北隅で検出する。形状は明らかでないが、調査区内でコーナー部分を確認する。検出面からの深さは10cm程で、底面はほぼ平坦である。埋土は上層が黒色土、下層が黒色土に八女粘土ブロックを混合している。遺物は出土していない。



第 21 図 SK21・22 及び出土遺物実測図 (1/30、1/3)

SK21 (第21図)

2区で検出する。長軸1.6m、検出面からの深さ60cmほどを測る。壁面はやや不整形であるが、底面はほぼ平坦である。埋土は黒色土と八女粘土の混合土を基本とし、コンテナ1箱の遺物が出土している。土坑埋没後には緩やかな凹凸面に古墳時代後期～古代に位置付けられる包含層(1層)が堆積している。

出土遺物(第21図 65～79) 65～76は上層包含層(1層)出土で、77・78はSK21埋土(2～5層)出土、79は包含層とSK21出土の接合資料である。65は口縁端部を折り曲げており、天井外面に回転ヘラ削りが残る。66の天井外面はヘラ切りである。67～71は坏である。68～70は外底面ヘラ切り、71は外底面回転ヘラ削りを行う。72～76は古墳時代後期の蓋坏である。73にはヘラ記号が残る。74は切り離し部分にのみ回転ヘラ削りを行い、その内側は手持ちのヘラ削り痕が残る。

77は返りを有する坏身である。78は堿の胴部で、外面は擬格子のタタキの後カキメを行っている。内面は車輪状の当て具痕が残る。79は壺胴部である。回転ナデを行うが、外面にはカキメが残る。

SK22 (第21図)

2区で検出する。当初やや不整形な土坑と考えたが、土層観察の結果SK22とした部分の大半である平坦面は遺構面上面の包含層であることが確認できた(第13図)。また、北東隅でわずかに検出したビット状の掘りこみ部分には八女粘土ブロックを混合した黒褐色土が堆積しており、この部分のみが包含層堆積以前の掘りこみであると考えられる。遺物は分別できていないが、大半が包含層部分からの出土である。

出土遺物(第21図 80～82) 80はボタン状を呈する蓋のつまみである。81は高台を有する壺の底部である。外面は回転ヘラ削りを行う。82は玉縁状を呈する口縁部である。

3) ビット

ビットは少数検出するのみである。埋土は黒～黒褐色土で、検出面からの深さは30cmに満たないものがほとんどである。遺物が出土したものについても小破片がほとんどである。SP10～13からはそれぞれ弥生時代中期後半代と考えられる小破片が数点出土している。また、SP23については深さ3cm程度で遺構面直上の包含層の一部であると考えられる。

4) 小結

今回の調査区は削平によって平坦化された八女粘土が露出する丘陵低位部にあたり、検出遺構は弥生時代中期後半～末の遺物が多量に出土する溝(SD01)と時期不明の土坑・ビットである。また、2区では遺構面直上に古墳時代後期～古代の遺物を含む包含層が形成されている。SD01はこれまでの調査によって、北側の15・53次調査でその延長が確認され、更に北側は35・40・58次、南側は46次調査検出溝につながるものと考えられており(第2図)、丘陵を縦断し区画する溝であり、運河としての機能も想定されている。15・53・118次調査の成果によれば、弥生時代中期中頃～後半に掘削され、中期末前後には溝としての機能が停止したのと考えられるが、その他の調査区では上層から後期前半代の遺物も出土している。また、各調査地点でも見られる下層の水成堆積層からは流水があったことが想定できる。なお溝底レベルは北側から35次で標高4.1m、58次で3.7m、40次で4.3m、15・53次では4.8m、118次では西側で4.26m・東側で4.07m、46次では4.2mを測り、現時点ではほぼ中央にあたる15・53次調査地点が最も高所となっている。後世の削平により、現在は本来の形状が失われているが、掘削当時は現在より更に1m以上の深さを有し、溝幅も3～5mに復元できる。今後の調査によってさらに、その機能・性格が明らかとなるであろう。



写真7 1区北西半全景(南から)



写真8 1区北西半全景(東から)



写真9 1区南東半全景(北東から)



写真10 SD01(北西から)



写真11 SD01土層



写真12 SD01上層遺物(34・36)出土状況(西から)



写真 13 SK02 (西から)



写真 14 SK02 土層



写真 15 SK03 (北西から)



写真 16 SK05 (北から)



写真 17 SK05 土層



写真 18 SK06～08 (東から)



写真19 SK06土層



写真20 SK07土層



写真21 SK08土層



写真22 2区全景(北西から)



写真23 1区北西壁土層



写真24 2区北東壁土層

報 告 書 抄 録

ふりがな	ひえ 60							
書 名	比恵 60							
副 書 名	比恵遺跡群第89・118次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1130集							
編 著 者 名	長家 伸							
編 集 機 関	福岡市教育委員会							
所 在 地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1							
発行年月日	20110318							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯	東 経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ひえ 比恵遺跡群 第89次	福岡県福岡市 博多区博多駅南 4丁目124番1	40132	0127	33° 34' 46"	130° 25' 47"	20031119 ～ 20031210	250㎡	記録保存調査
ひえ 比恵遺跡群 第118次	福岡県福岡市 博多区博多駅南 6丁目6番2	40132	0127	33° 34' 38"	130° 25' 57"	20090225 ～ 20090312	192㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
比恵遺跡群 第89次	集落	古墳時代	溝・ピット	弥生土器・土師器				
比恵遺跡群 第118次	集落	弥生・古墳・古代	溝・土坑・ピット	弥生土器・土師器・須恵器				
要 約	<p>比恵遺跡群第89次調査は遺跡群中央部分に当たる。割平・掘乱が大きいのが、東側の6次調査で確認した比恵1号墳の周溝延長部分を確認した。本調査区内で屈曲する可能性が考えられ、これによれば周溝内長34mの略方形に復元できる。</p> <p>比恵遺跡群第118次調査は遺跡群南側に位置する。弥生時代中期後半～末の遺物が多量に出土する溝1条を検出した。この溝は北側に位置する第15・53次調査地点でも確認されており、更に北側の35・40・58次調査で検出した溝につながる可能性がある。この溝は集落を区画する基準としても機能したと考えられており、当時の景観を復元する際、重要な遺構である。</p>							

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1130集

比 恵 60

- 比恵遺跡群第89・118次調査報告 -

2011年（平成23年）3月18日発行

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印 刷 有限会社 浦永印刷
福岡市東区坂田1丁目9番23号

